



## ○2句目「運命在皇天」の「皇天」に込められている中国古典籍の考察

この「皇天」については、既に語釈の頁で、『書経』『楚辞』等に用例が見えることは言及した。

ところが実は、この語は、次の宋玉の「九辯五首」からの投影を通して考察すべきものではないかと考える。その根拠を若干以下に述べてみる。

全釈漢文大系本の「九辯五首」の頁には次のような作品解説と、各章の要旨・原文通釈・語釈等を載せる。それを引き、論を進める。

まず、この「九辯五首」については「屈原の弟子とされる宋玉の作である。(中略)「九辯」の意味については「宋玉其の師の忠信にして放たれしを惜しむ。故に此の辞を作りて以て之を辯ず。皆原の意に代わる。九の義も亦九歌と同じ」と五臣注にいう。(中略)「辯」は忠邪の分かれる所以を釈き、師に代わってその冤罪を弁明する意である。即ち、本文中の「余」「我」などの一人称は全て宋玉が屈原の立場に立って述べたものである。『文選』では、「九辯五首」として初めの五章を収載している」(「九辯五首」題意 72～73頁)との概説がある。この作品の三章・四章に次のような「皇天」の用例を見ることが出来る。

## ▼三章

皇天平分四時兮

竊獨悲此廩秋